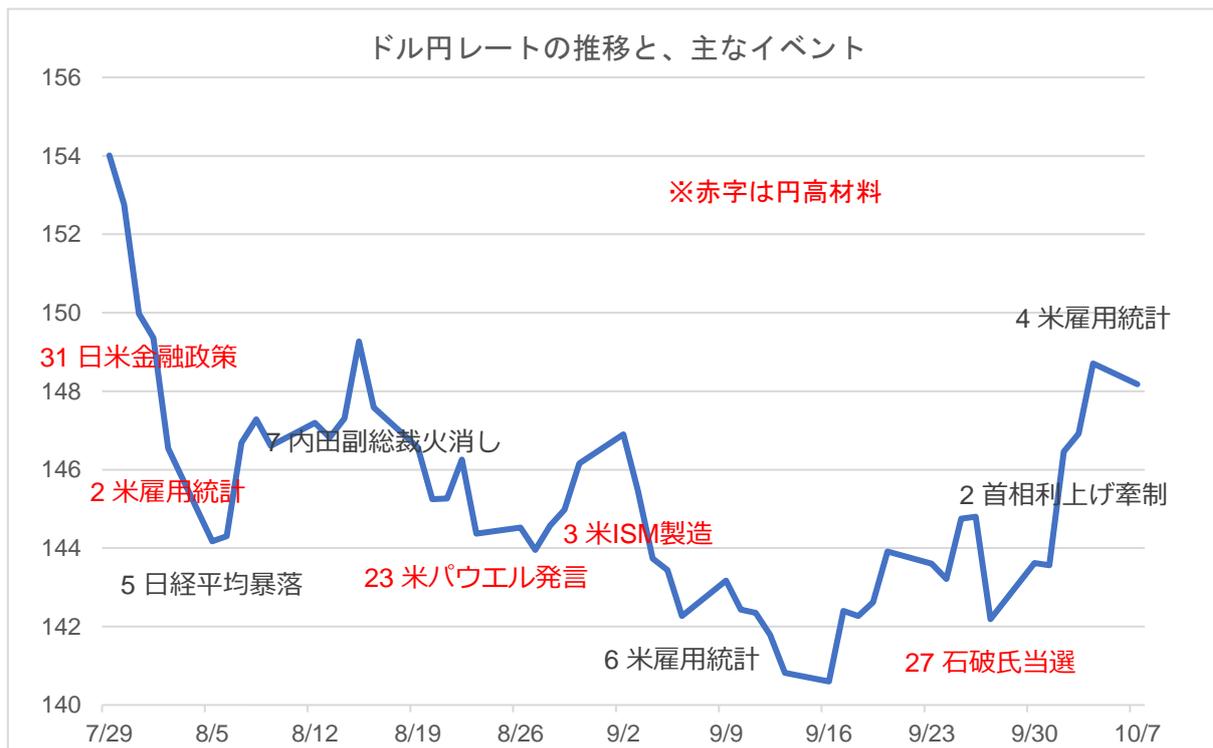


## 為替市場の乱高下について

金融市場の不安定な動きが続いています。そこで今月のCBCANEWSでは、最近の為替市場の乱高下について、市場を動かす要因や為替市場の需給動向など、分かりやすくまとめてみました。

### 📌 市場を動かしている要因

まずは、為替レート（ドル円）の推移と、市場を動かした主なイベントを確認しましょう。



7/31 日銀が市場の予想に反して利上げを行い、今後も利上げを継続する方針を明白にしました。同日、米FRBは次回9月のFOMCで利下げを行う方針であることを明らかにしました。これにより、日米の金利差が急速に縮小するとの思惑から、急速に円高ドル安が進みました。その後、米国で景気減速を示す経済指標が相次いだことから、パニック的な円高ドル安となりました。

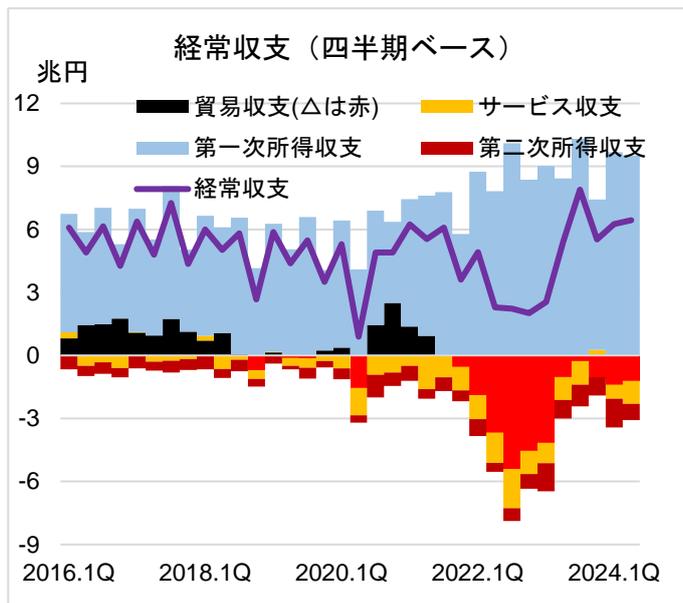
急激な円高を嫌し、8/5 日経平均株価が値幅で4千円を超える暴落となりました。これを受け、日銀の内田副総裁が株価に配慮した金融政策を行うとの発言をしたことから、円高ドル安にいったん歯止めが掛かりました。

その後も、米国の経済指標などを受け、不安定な相場が続きましたが、9/27 自民党総裁選で、利上げへの反対姿勢を打ち出していた高市候補が敗れ、利上げ容認派とみられていた石破氏が当選すると、再度大きく円高に振れました。しかしながら、10/2 石破首相が今後の利上げを牽制する発言を行ったことから、一転して円安ドル高に振れる展開となりました。10/4 米雇用統計が非常に強い数値となったことから、米国の金利低下期待が後退し、さらに円安ドル高が進みました。

このように、市場を大きく動かしたのは、日米の金融政策に関するもの、米国の景気動向に関するもの、つまり内外金利差に影響するものが殆どであったことが分かります。

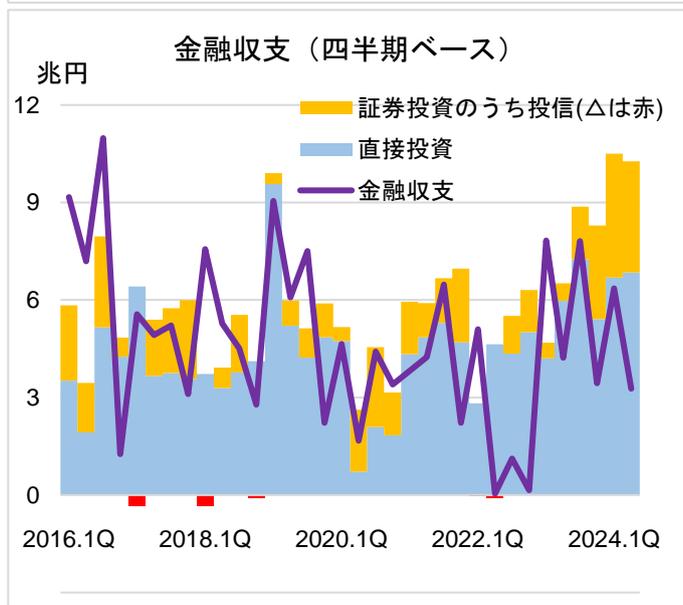
## 為替市場の需給動向

今回は、国際収支を通じて、為替市場の需給動向を確認しましょう。



まず、経常収支です。貿易収支は2022年後半以降赤字が定着、サービス収支も赤字続きです。一方、海外への投資で収益を上げており、第一次所得収支は大幅な黒字です。結果、トータルの経常収支は、四半期ベースで足下約6兆円の大幅黒字となっています。

次に、金融収支です。金融収支は、事業戦略に基づく直接投資と、一般的な証券投資や金融派生商品取引など（以下、証券投資等）に大別されます。トータルの金融収支は支出超が続いています。ただし証券投資等は、短期的に目まぐるしく増減するうえ、為替ヘッジを交える取引も多く、為替需給に与える影響を把握するのは容易ではありません。一方の直接投資は、収支が概ね安定的に推移し、国内から海外への投資が海外から国内への投資を上回り、四半期ベースで足下約6兆円の支出超となっています。加えて、証券投資のうち投信部門では、新NISAの影響で海外株式投信が人気化し、支出超が拡大しています。2つ合わせると、四半期ベースで足下約10兆円の大幅支出超となっています。



こうみると国際収支全体では、構造的に円から外貨への取引需要が強いのではとも考えられます。

足下の為替市場と照らし合わせると、内外金利差縮小の影響から証券投資等で外貨から円への取引が増す局面では円高に振れやすいものの、その影響がいったん収まると、構造的な需給バランスから一転円安に振れやすくなるのではと推察されます。

当面は上記2つの綱引きにより、不安定な為替市場が続くのかもしれません。

一般社団法人全国経営診断士協会

〒105-0012

東京都港区芝大門 1-1-32

御成門エクセレントビル 8階

TEL : 03-6459-0161

FAX : 03-6435-7717

mail@cbca.jp

http://www.cbca.jp

お問い合わせ先